



内科・胃腸科・呼吸器科・放射線科

# ゆとりが丘クリニック 便り

〒020-0638 岩手県滝沢市土沢541番地

TEL 019-699-1122 / FAX 019-699-1121

平成29年6月22日(2017) 第0049号

## 『研修医の頃』

院長メモ



“先生、なんとかあと1ヶ月、いや2週間でいいから…”

回診も終わり看護師詰所(当時はナースセンターとは言わなかった)に戻ろうとした私に、半年程前から私が主治医を努めていた患者 Yさんが、手を合わせて何度も拝むように頭を下げた。

患者さんは80歳代前半の女性で、入院病名は腰痛と慢性胃炎。今にして思えば何で入院になったのかはわからないが、私が研修医になった頃は、地方の病院では冬期間だけ入院し雪が融ける頃になると退院する、いわゆる越冬部隊と称する患者さんが数名入院していた。

“困ります。ここは県立病院です。Yさん以外にも入院を待っている人が何人もいます。次の患者さんの為にベッドを空けて下さい。”と毅然と答え、頭を下げ続ける患者さんを背に病棟を出た。医局に帰って、指導医のS先生にその旨報告した。先生は“そう…”と答えただけであった。

その患者さんが退院して1ヶ月程経った頃、S先生に言われた。“この前退院した Yさんが亡くなったそうだ。これから御自宅に死体検案に行くから。”

昼休みを利用して、白衣を着たまま迎えに来たタクシーに乗り込んだ。病院のある市内からかなりの距離を走って、立派な門構えの大きな農家に着いた。家人に案内されて玄関から居間、仏間、次の間、さらに奥へといくつかの部屋を通り抜けた。結局この家の祖母である患者さんは、畳の間を通り抜けたその先の土間に寝かされていた。冬のものとは思えない薄い布団に夏掛けを頭まで被せられていた。側で走り回っていた小さな男の子に尋ねた。“おばあちゃんは死んだからここに運ばれたの?”“ううん、病院から帰って来てからずっとここ。”患者さんの頭のすぐ上で紐で吊るされた裸電球が揺れていた。

帰りのタクシーの中で、打ちのめされたように黙りこくった私に、S先生が誰に言うともなくつぶやいた。“こういうこともあるんだよな…”

私が医師としてスタートを切った昭和56年、もうすぐ春になろうとする頃の地方病院の出来事である。入院期間の短縮による医療費抑制が、国を挙げての政策となることなど想像もしなかった頃の話である。

## 7月休診日・診療時間のお知らせ

(日曜・水曜・祭日は休診日です)

平成29年7月

- ★ 7月22日(土) 午後受付17時終了  
研究会出席の為
- ★ 7月29日(土) 午後休診  
岩手県医師会長受章  
祝賀会出席の為



※場合により変更になる場合がございます。御了承願います。

日	月	火	水	木	金	土
						1
②	3	4	5 午前検査外来	6	7	8
⑨	10	11	⑫	13	14	15
⑬	⑮	18	⑲	20	21	22
⑳	24	25	㉔	27	28	29
㉖	31					

○=休診日 ★=診療時間変更

# 死に写るいのち

## -2017年-

講演

野の花診療所 院長  
徳永 進 先生

平成29年

7月 2日 日

12:00 ~ 15:00

岩手県公会堂

大ホール 盛岡市内丸11-2

**-入場無料-**



死を迎える人たちのための診療所  
「野の花診療所」を開設したのは2001年の12月。19床の有床診療所だが、開設した当時から、家で最後の日々を送ろうとする人たちの力になりたいと思っていた。在宅を専門にする看護師もやってきて、病棟と在宅の両方でホスピスケアを実践していくことになった。2013年からは、在宅ホスピスをもっと広がっていくよう、工夫のいくつかを重ねた。

(著書：在宅ホスピスノート はじめに より)

先生のユーモアたっぷりのお話を楽しみにしてください。

オープニング演奏

岩手女子高等学校 箏曲部

「和の心を大切に」をモットーに、精一杯演奏いたします。



医療懇話会のご案内

このマガジンは当クリニックホームページ(クリニック便り)でもご覧になれます。

ゆとりが丘クリニック

検索